

令和三年度 前期日程  
入学者選抜学力検査問題  
国 語

〔注意〕

- 1 机上に受験票を提示しておくこと。
- 2 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけない。
- 3 解答は必ず別紙の解答用紙の指定された箇所に入力すること。
- 4 解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入すること。
- 5 この冊子の問題は余白を含めて九ページ、解答用紙は一枚からなっている。
- 6 この冊子のうちに落丁・乱丁および印刷不鮮明な箇所があれば、手をあげて申し出ること。
- 7 この問題の内容に関する質問には答えない。
- 8 この問題の満点は百点である。文学部日本・中国文学科は四百点に、文学部欧米言語文化学科・歴史学科・和食文化学科および公共政策学部は二百点に換算する。
- 9 字数制限のある解答では、句読点や括弧なども字数に含める。
- 10 問題冊子は持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合上、文章の一部を省略し、表記を改めたところがある。(40点)

(著作権の関係で不掲載)

(著作権の関係で不掲載)

(著作権の関係で不掲載)

(佐藤弘夫「文庫版刊行にあたって」『神国』日本 記紀から中世、そしてナショナリズムへ』による)

(注) ○コスモロジー……宇宙論。世界観。この世のしくみや成り立ちに関する考え方。 ○齋会……大勢の僧侶に、齋食といわれる食事を供する法会。 ○結縁……仏道に縁を結ぶこと。未来に悟りを開くきっかけを得ること。 ○厭離穢土……煩惱に汚れたこの世をさらい離れること。 ○欣求浄土……極楽浄土に行くことを心から願い求めること。

問一 傍線部①～⑩について、カタカナは楷書の漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで記せ。

問二 空欄 X・Y・Z に入る表現を、それぞれ以下の A～ウの中から選び、記号で答えよ。同じ記号は複数回使わない。

A しかし    I たとえば    ウ ただし

問三 傍線部 A 「それは時空を垂直に移動した場合でも同様だった」とはどういうことか。「時空を垂直に移動」することの内容がわかるように、説明せよ。

問四 傍線部 B 「わたしはかつてこの説話を読んだとき、強い違和感にとらわれた」について、次の問いに答えよ。

- (1) 筆者のとらわれた「違和感」とはどのようなものか、説明せよ。
- (2) その「違和感」は、どのように考えることによって解消されたのか。「本朝の神明・仏法」の機能を手がかりに、百字以内で説明せよ。

問五 傍線部 C 「コスモロジーの転換」とはどういうことか、本文全体の論旨をふまえて、百三十字程度で説明せよ。

## 二

次の文章は、江戸時代の女流歌人井上通女（一六六〇～一七三八）の旅日記の一部である。（甲）は、一六八一年、作者が二十歳の時に、讃岐国丸亀藩の家臣であった父とともに江戸に出た時の旅日記。（乙）は、一六八九年に、故郷の丸亀に帰るさいの旅日記である。文章をよく読んで、後の問いに答えよ。（30点）

（甲）桑名より船にのる。暮かかりて、星のひかりあざやかなるに、黒き雲、むらむらただよふ。人々、「此のわたり、風ふけばあやうし」とて、空をみつつこがれゆく。我は何事もいさしらず、ただ人のいふを聞きふせり。風もいでこず、いとどのかにて、子の時ばかりに熱田につく。やがてものしたためなどして、宿をいでゆく。まだ夜ふかければ、いづかたもみえず。鳴海、矢作などいふを聞きすぎぬ。夜あけていとよくはれわたりたるに、きのふの雪にやあらむ、むかふなる山の峰々、いとしろくみゆ。「八橋はここわたりとこそ聞きつるに」といへど、したがふ者ども、「さうけたまはりしは、一里ほどあなたに、沢は畑のやうになり、橋は杭ばかり残りて、杜若もいづちいにつむ、ゆかりの色もなければ、御覽すべくもなし」といひしが、聞えしさるあとこそなほゆかしけれとおもへど、かくいへば見ずして過ぎ行きぬ。

（乙）今宵は赤坂にやどる。あるじの女房すきものにて、我何となく硯にむかひて物かきすさむを、ゆかしがりて、人しづまりて、わかき女の宵よりきたりてつかふるにあないさせて出できたりぬ。なにやかや物がたりして、手習の反古どもをせちにゆかしがれば、詩や歌やかきてやる。よろこぶ事かぎりなし。其身の有さまなど語りて、「はやうかか事ども、及ばずながら心よせ侍りつるを、おもひのほかなるよすがにつきて、かくかしがましき市の中のみ、本意にもあらずおもひ侍る」などいふ。「おやのさとはいづくぞ」といへば、「三河の国八橋のあたり」とこたふ。「今もむかしの跡はありや」ととへば、「八橋の柱にや、かたばかりに残れるを、其あとと申しつたへ侍る。業平の塚も侍る」とかたる。業平はそこにて終り給ひしともみえざめるを、さる人の過ぎがてにながめたまひけむあとなれば、後の世までのしるしにしおき侍るにやとおもはる。ややありて帰りぬ。鳥もほどなくあかつきを告げわたれば、起き出でて、十八日、例のあけぼののころほひ、やどりを出づ。よべの女ども、名ごり惜しめり。

〔東海紀行〕と『帰家日記』による

(注) ○子の時……夜中の十二時ころ。 ○熱田、鳴海、矢作、赤坂……今の愛知県の名。 ○杜若もいづちいにけむ、ゆかりの色もなければ……「猶はるぼるの旅衣、三河国に着きしかば、ここぞ名のある八橋の、沢辺に匂ふ杜若、花紫のゆかりなれば、妻しあるやと、思ひぞ出る都人」(謡曲「杜若」)による。

問一 傍線部ア くオを、文脈を考えながら、現代語訳せよ。

問二 二重傍線部「聞えしさるあところなほゆかしけれ」には、作者のどのような気持ちが表れているか、わかりやすく説明せよ。

問三 波線部「かかる事ども」とは、具体的にどのようなことか、本文中より抜き出せ。

問四 破線部について、「さる人」とは誰のことをかを具体的にしながら、わかりやすく現代語訳せよ。

## 三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で送りがなを省略したところがある。(30点)

膠山黄氏有隠君子、曰在龍。性不治生産。絶世務而好奕。常閉戸居。戸外人聞子声、丁丁然、窺之、則两手各操白黒子、分行相攻殺。或默然目上視而思、或欣然笑也。人称曰独奕先生。先生与人無争、輕財樂施与、郷人懷其徳。嘗避盜踰嶺、嶺半盜起、邀先生。先生色不变。盜呵曰、汝何為者。先生曰、予黄在龍也。盜相顧笑曰、母驚我公。送之嶺下。盜焚隣人居、延先生廬。盜群起撲火、火不滅。乃共捶其始禍者。先生兄弟三人、伯善鼓琴、仲好芸花竹、先生好独奕。或求对亦不辭也。先生開枰布子、子伯仲常侍局。先生微問可否、二子各以意对。先生曰、若長于守、若長攻、然皆偏将材也。使握中權、決機兩陣難哉。年七十有七卒。其独奕未嘗少衰云。

魏禧曰、或曰、古嗜奕者衆矣。未<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>独奕者。曰、有<sup>レ</sup>之。奕攻圍

衝劫<sup>シテ</sup>、變化<sup>ハ</sup>通<sup>ス</sup>于兵法<sup>ニ</sup>。諸葛武侯臥<sup>スル</sup>隆中<sup>ニ</sup>時、未<sup>ダ</sup>聞<sup>カ</sup>有<sup>リ</sup>十夫之聚<sup>ニ</sup>指<sup>シ</sup>麾<sup>シテ</sup>旌<sup>ヲ</sup>幟<sup>ヲ</sup>教<sup>ム</sup>坐<sup>セ</sup>作<sup>セ</sup>也。一<sup>ク</sup>出<sup>テ</sup>而戰<sup>ハ</sup>必勝<sup>ス</sup>、以<sup>テ</sup>仲達之智<sup>ヲ</sup>、畏<sup>ル</sup>之如<sup>シ</sup>虎。吾意<sup>おも</sup>其<sup>ニ</sup>獨<sup>ニ</sup>居<sup>テ</sup>抱<sup>ク</sup>膝<sup>ヲ</sup>時、日<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>ヲ</sup>思<sup>フ</sup>、手<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>經<sup>ス</sup>營<sup>ス</sup>、未<sup>ダ</sup>嘗<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>在<sup>リ</sup>兩陣<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>也。非<sup>ニ</sup>獨<sup>ニ</sup>突<sup>レ</sup>而何<sup>哉</sup>。先生之意、其<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>測<sup>リ</sup>識<sup>ス</sup>哉。

(魏禧「獨奕先生伝」より)

(注) ○膠山……山の名。 ○奕……囲碁のこと。 ○子……碁石。 ○丁丁然……碁石を置く音の形容。 ○分行相攻殺……敵味方に分かれて攻撃しあうこと。 ○呵……どなること。 ○廬……粗末な家。 ○群起撲火……みんなで立ち上がって火を消すこと。 ○捶……打つこと。 ○伯・仲……兄弟の一番上を「伯」、二番目を「仲」という。 ○芸花竹……花や竹を栽培する。 ○求対……対局を求めること。 ○枰……碁盤。 ○偏將……副將。 ○中樞……司令部。 ○決機兩陣……兩軍の間で適切な作戦を決めること。 ○魏禧……この文の作者。 ○衝劫……攻撃すること。 ○諸葛武侯……三國蜀の諸葛亮、字は孔明のこと。天才的軍略家といわれる。 ○隆中……諸葛亮が出馬するまで隠棲していた場所。 ○十夫之聚……男性十人の集団。 ○指麾旌幟……旗で指図すること。 ○坐作……すわったり立ったりすること。 ○仲達……三國魏の司馬懿の字。諸葛亮の好敵手だった。 ○經營……考えに基づいて動作すること。

問一 傍線部 a、e の読みを、送りがなも含めてすべて現代かなづかいによりひらがなで記せ。

問二 傍線部 アについて、なぜこのような名で呼ばれるようになったかを説明せよ。

問三 傍線部イを

- (1) すべてひらがなで書き下し文にし、
- (2) なぜ盗がこのように言ったかを説明せよ。

問四 傍線部ウを現代語訳せよ。

問五 傍線部エを

- (1) すべてひらがなで書き下し文にし、
- (2) 作者がこのように述べる理由を説明せよ。